

## 自然遺産保護に企業が挑戦した5年の歩み



岩堀・環境クリアーJV

埼玉県川越市六軒町1-3-10  
 電話 049-225-5111  
 FAX 049-225-1455  
 Email: iwamotos@iwahori.co.jp

ホームページもご覧ください。

<http://www.iwahori.co.jp>
<http://www.jecweb.co.jp/>


オリジナルキャラクター  
「ひめちゃん」

名称は「緑の森フェスタ」の来館者から募集し、ヒメザゼンソウをイメージした「ひめちゃん」が、圧倒的な支持を得て決定した。

民間企業が、公的自然遺産を管理運営するには、数々のハードルがあった。私たちはそれを独りよがりではなく、行政と忌憚ない意見の交換をし、地元地域の方々と深い交流を重ねてきた。又、利用される来館者の皆さんの声を聞き、全ては未来に自然遺産として子供たちに引き継いでもらうフィールドを守ることによって、この5年間を無事に運営することができたと実感している。



お世話になった全ての皆様に感謝します。

## 指定管理者を経験して

今になって思うことは、5年間で運営を閉じることの寂しさ、ここまで築いてきたのという無念さ。来館者の皆様方から「辞めないで欲しい」との声を多く聞き、改めて私たちJVが行ってきたことが皆さんの心に思い出となっていたのかと痛感する。

新たな指定管理者が指名され、再び5年間違った形で運営されるのだろうが、狭山丘陵が誇る「里山」は、その姿や役割は変わることなく、息する動植物に生命の息吹を育てていくのだろう。四季折々に見せる里山の姿は人々に自然の大切さと環境の恩恵を伝えていくに違いない。

ここで経験したことは、建設業を営む私たちJVにとって得がたいものになったのは事実であり、本来の業務だけなら関わることない人々と触れ合った時間は、新しい建設産業の在り方に必ず影響し、息づくことは間違いない。それは、自然に対する「尊重」であり、「畏敬の念」であり、環境への最大の「気配り」と、指定管理者を経験した私たちの結論である。

(運営総括: 岩本聡、青鹿佳民、岩堀雅之)

## 「さいたま緑の森博物館」JV運営委員会

委員長	岩堀 弘明
副委員長	矢沢 研二
運営総括	岩本 聡
運営副総括	青鹿 佳民
スタッフ会総括	岩堀 雅之
スタッフ会委員	工藤 諭
会計担当	佐藤 暢紘
案内所スタッフ	
	名執 修二
	餐場 みちこ
	神山 敏夫
	岡部 賢助(退職)

指定管理者5年のドキュメント  
(さいたま緑の森博物館)

岩堀・環境クリアーJV

特別号

## ハイライト:

- 民間企業が名乗りを上げた
- 素人のメニュー
- 宮様ご夫妻
- 自然とITツールの融合
- ストップ ザ バット ゲスト
- 皆で盛り上げよう感動のドラマ「絆」
- マニアックな人たちが集まった
- トンボが飛んだ!

## 目次:

エピソード1.2	1
宮様ご夫妻	3
ビジュアル図鑑 監視員制度	4
緑の森フェスタ	5
緑の森倶楽部	6
ビオトープ	7
プロローグ1.2	8

## 民間企業が自然遺産保護事業に名乗りをあげる

2004年4月、「官から民へ」と時の総理大臣(小泉首相当時)のリーダーシップにより、全国各地で行政が運営していた公的施設の管理運営に、民間企業が参画できるという大きな門戸が開いた。埼玉県では「指定管理者制度」をいち早く導入し、トロの森で一躍脚光を浴びた狭山丘陵に誕生させた自然遺産保護を目的とする「さいたま緑の森博物館」の開館10年目に当たる2005年、民間から広く指定管理者を公募することが発表された。

埼玉県が指定管理者の公募に踏み切る前年の2004年9月、日本生態系協会会員として自然保護に造詣の深い岩堀建設工業株式会社の岩堀弘明会長が中心となり、この指定管理者事業に名乗りを上げるため、特別プロジェクトチームが岩堀建設工業株式会社内に発足した。そして民間による自然保護活動推進に賛同した施設管理業を県内で展開する日本環境クリアー株式会社の矢沢社長もそのチームに加わり、2社が共同で取り組むことになった。

建設会社と施設管理会社という、自然保護には一見ミスマッチな組み合わせのJV。しかも公共施設の運営は全くの素人である両者は、まず「さいたま緑の森博物館とは何か」から勉強することから始まった。

## 手作りのオリジナルな運営管理メニュー

入間市が運営していた従来のイベントを継承し、大切な里山を多くの県民に認識してもらうため、更に来館者を増やすには何が必要か。運営1年目、2年目、3年目と契約満了の年まで毎年毎年、JVでは議論が交わされた。そのような熱い思いは、運営に携わったスタッフだけでなく、リピーター、近隣自治会の方々、有識者などの各コミュニティを巻き込み、貴重な意見や要望、アイデアを頂いた。

イベントでは、日本の自然を守る里山の役割を伝える「里山教室」、ビオトープ体験の「トンボ池再生の活動」、魅力を最大に表現した春、秋の「緑の森フェス

さいたま  
緑の森博物館  
(春4月)

国木田独歩の「武蔵野」から宮崎駿の「トトロの森」までありとあらゆるジャンルの書物を研鑽、実際に何度も現地に出かけては観察会や他のイベントに参加。そこで出会った来館者の声を聞き、必要と思われる情報は手当たりしだい収集に走ったのだった。

岩堀建設ではビオトープ管理士によるビオトープ手法を使った土木工事が環境建設事業部により積極的に進められ、その技術を磨いた。一方日本環境クリアーでは「秋が瀬公園」の施設管理を受注し、公園施設のノウハウを徹底的にマスターしていった。

そしてJVは、2005年10月に応募。審査委員へのプレゼンに臨み、NPO法人、環境団体などの強カライバル十数社を抑え、努力の甲斐あって、県内では異例の民間企業が指定管理者に指名されたのだった。

タ」、代表する生息動植物鑑賞会や夜間鑑賞会が実現した。管理面では、ビオトープ技法を駆使した除草や監視員制度の



施行によるマナーの向上、リピーターの集い「緑の森倶楽部」の発足、ヒメザゼンソウなどの生態系調査 またビジュアル図鑑やブログ形式によるオフィシャルサイトの作成運営など多くのオリジナルメニューが誕生した。

### 常陸宮ご夫妻を迎える

「日本野鳥の会」総裁で環境問題に精通され、絶滅危惧種保護活動にもご理解の深い常陸宮ご夫妻が「さいたま緑の森博物館」を非公式で訪れたのは、JVが指定管理者として運営に着手して2ヶ月が経過した2006年6月のことだった。大変光栄なことではあるが、急なお話で準備期間もなくお迎えすることになり、散策コースや当日の段取りなどに奔走した。

当日は梅雨の晴れ間となり、岩堀会長が県環境部長らと共に同行。この年4月、川越市で天皇陛下ご夫妻をお迎えした折、小江戸川越観光協会会長としてご案内させて頂いたばかりの岩堀会長にとって、2度目のご皇室対応となり、名誉なこととなった。散策路を先導したのはスタッフの岡部賢助。緑の森博物館開館より勤務している彼は、まさに「森の生き字引」としての存在。縦横無尽に里山の知識を申し上げ

ることができた。

この突然の慶事は、「日本野鳥の会」と深く繋がる切っ掛けとなり、やがて「日本野鳥の会」との共同開催による「野鳥特別観察会」へと新たなイベント開催に発展し、狭山丘陵に生息する野鳥に県民意識の広がりをみせることになった。



常陸宮ご夫妻に里山フィールドを説明する岡部賢助  
岩堀会長は、天皇陛下ご夫妻に続いての皇室ご案内同行となった。

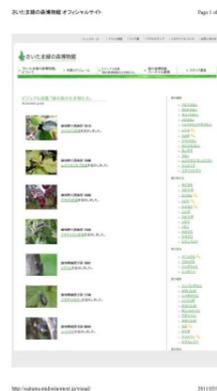
### ビジュアル図鑑を作成し、生息する生態系を日々紹介

JVが指定管理者に指名された特徴的な1つに「ビジュアル図鑑」の作成がある。ネット上でも公開されたこの図鑑は、「さいたま緑の森博物館」に生息する植物、昆虫、鳥、小動物などの四季折々に見せる姿とデータを収録したアルバム形式の図鑑だ。1階展示室に設置した大型モニターで表示されるデータは、来館者の観察ツールとなった。来館者は、フィールドで撮影した画像と図鑑に収録されたデータを比較して、撮影したもの名前、生態を知ることができる。収録されていない生物や植物を発見すると案内所にその画像データを持ち込み、文献で確認、有識者の助言により更新データとして登録される。5年間で135種類の

動植物を登録することができた。これは狭山丘陵に生息するわずかな代表選手に過ぎないが、30種類からスタートしたことを考えると、支援して頂いた方々に感謝せずにはいられない。



### ビジュアル図鑑



### 地元市民と立ち上げた「監視員制度」(マナー向上対策)

地域の自治会では、「さいたま緑の森博物館」には頭を悩ませていたことがあった。それは、犬の放し飼いや家電、車の不法投棄、若者たちのバイク乗り入れ、深夜の火遊び、日常茶飯の盗掘。JVは地元自治会、有識者、ボランティア団体などから構成する運営連絡協議会を組織し、こうした問題をどのようにしていくか討議を行った。そして誕生したのが「監視員制度」だ。自治会の人たちが中心となって、博物館の散策に訪れたら「監視員」の腕章をつけ散歩をしながらマナー向上を訴えていく。スタートは、一斉に実施日を決めて行ったが、次第に監視員腕章を積極的に掲げ地元の方々のご家族で参画するようになり、年間延

100人を超すまでに成長した。監視員仲間が集ってできたボランティア団体「みさゆ会」も誕生し、来館者のマナー向上に一役も二役もかかって頂いている。皆様のご苦勞によってマナーは格段に向上。安心できるフィールドになっていった。



年2回行われた運営連絡協議会で「監視員制度」は施行された。

### 緑の森フェスタで大きく広がった共感の絆

JVの誰もが感じていることがあった。それは県民の認知度が今一歩上がらない。イベント参加募集だけでは何か物足りないということだった。また、希少植物のヒメザゼンソウ群生地として学術的に紹介されていることももっと知ってもらいたい。そこで議論の末発想されたのが、「緑の森フェスタ」という期間設定のイベントだ。これには、日ごろ狭山丘陵を創作の場としている芸術家や音楽家、写真愛好家などに参加してもらえ展示やステージも作ろうと広がり、地元の農家の方々も参加してもらえよう特設市場の設置も創設。毎年ヒメザゼンソウの開花時期と文化の日を中心に年

2回9日間にわたるメインイベントに成長した。5年間のフェスタに参加した方々は、15,000人になった。



フェスタの名物となつた水鳥の池コンサートで、ファンも生まれた武蔵野音楽大学の学生ユニット。毎年歴代の4年生たちが、緑とマッチした金管五重奏を奏でる。野鳥たちの競演も聞きどころだ。

### オフィシャルファンクラブ「緑の森倶楽部」の誕生

緑の森博物館を愛する人たちはたくさんいる。しかし、皆個人として植物を楽しみ、虫を観察し、鳥を追う。自分の活動を邪魔されたくはない。でも里山を愛することはみな共通だ。そうした思いにたっぴりピーターたちに声を掛け、お互いの情報を交換するサークルを立ち上げた。それが「緑の森倶楽部」の誕生だ。案内所のスタッフ名執修二と餐場みちこが事務局を引き受け、個人として博物館に繋がっていた人々をそれぞれ結びつけ、第2回のフェスタ開催に合わせ設立総会を開催。初代会長に吉田隆介氏を皆で推薦して「さいたま緑の森博物館」をフィールドとして活動するオフィシャルファンクラブのボランティア団体が産声を上

げた。会員数は5年間で130名を超え、館内の生息動植物調査や自然環境の講演会の開催、各種イベントの支援や博物館運営の助言など、活動は幅広い。開館時より活動していた「埼玉森林サポータークラブ」と共に今や掛替えのない存在だ。



緑の森倶楽部主催の夜間観察会

### トンボ池再生から始まったビオトープ活動

企画した当初、参加するのは自分たちだけではないかと心配した。あまりにも地味なイベントだ。「ビオトープ」とは何かから始めなければならないと思っていた。しかし、こうした思いは全て杞憂となった。参加者は回を重ねるごとに多くなり、親子が、高校生が、研究者が、若い女性たちが、日常はIT片手のサラリーマンまでと、さまざまな職業、家庭環境、自然への思いなど全く違う方々が参加した。5年間で延250名のビオトープ戦士だ。

画を急遽あわてて作ったほどだ。「うれしかった。大切にしかった。もっと続けたかった」と率直な感想だ。

人間の手で、自然の形のままに池を整備すれば、トンボは見事に再生した。秋にはオニヤンマを始め数種類のトンボが飛び交う風景に戻った。

担当した二級ビオトープ管理士の岩堀雅之は、こまめに広がるとは予想だにしていなかったため、2年目の計



大人たちは、ビオトープ技法で池の整備。子供たちは水棲生物を観察し、池に帰すことを学ぶ。